

人間発達科学 I

第3回

人間とはなにか(2)

(2) 変わる胎児・新生児観

① 胎児・新生児研究の進展

■ 胎児の能力

- 聴覚→但し母親の声か、大きな音
- 嗅覚
- 記憶能力→母語の習得
- 陣痛のサイン: 母体とのせめぎあい
- 誕生のための「けなげで賢い動き」
 - 頭蓋骨を重ねて頭を小さくする。
 - 産道で二回転

■ 新生児の能力

- 把握反射
- 歩くように足を動かす（原始歩行）
- 大人をしのぐ顔を見分ける能力
- ことばとして自然かどうかの判断
- コミュニケーションへの適応
 - 語尾をあげる話し方に反応（正高、1993年）
 - 栄養摂取よりコミュニケーション
 - 仰向けとお座りという姿勢（竹下、1999年）

②人間をどうとらえるか

■ ポルトマンへの批判

「ヒトの新生児が未熟であるという証拠はどこにも見当たらない。それどころか誕生して間もないというのに、ニホンザルやほかの霊長類と比べて、はるかに成熟した行動を行うのである。ポルトマンの考えもやはり、赤ちゃんは受け身であるという見方に大きく拘束されていると言わねばならないだろう」

（正高、1993年）

■ しかし、もともとポルトマンも...

「人間の子ども^oの行動や、それが自立できず世話されねばならないということは、いうまでもなく晩成者の特性である。他方、目も耳も開いて生まれ、神経筋の状態も、原始的哺乳類の典型的な晩成者よりもはるかに発達している。」

（ポルトマン、1981年）

- 進化の過程で獲得し、遺伝的にセットされた新生児の特徴は、「環境」とのあいだでコミュニケーションを行うのに適したものになっている



人間の重要な特徴となっている。